

ドクターインタビュー

古川 福実 (ふるかわ ふくみ) 先生

和歌山県立医科大学 皮膚科教授

今回は和歌山の景勝地「紀三井寺」近くの和歌山県立医科大学皮膚科教授の古川福実先生をお訪ねし、お話を伺いました。

古川先生は、アトピー性皮膚炎だけでなく、美容皮膚科領域でも研究をされておられると伺っていますが、女性の患者さんにとって関心の高い、アトピーとお化粧品についてお聞かせいただけますか？

アトピー性皮膚炎の人、特に成人では顔面に出てくることが多いので、女性にとっては化粧の問題は常について回ります。アトピー性皮膚炎の患者さんが化粧をする場合、化粧品に対して「肌をきれいにみせたい」「赤みを消したい」といったニーズがあり、そこに化粧を制限することは精神的にも苦痛となることがあります。僕は、化粧はなくても皆さん十分に美しいと思うけど、やっぱり女性は基本的に更にきれいになりたい気持ちがあるので化粧をしたい…、そういうDNAみたいなものがあるって、根っここのところを医師からダメと言われると患者さんはつらくなりますよね。だから基本的には化粧はしたらいと思えますね。そうする方が精神的にもいいし、安心というか、安全な化粧品であれば使った方がいいと思います。そこでアトピー性皮膚炎の患者さんが化粧をする場合はまず保湿をしっかりと、肌状態を整えることが大切です。そして敏感肌あるいはアトピー性皮膚炎を対象とした臨床試験で、安全性と有効性について確認されたものを使用するのがベストです。

多くの先生が化粧品はダメとおっしゃる中で嬉しいおコトですが、その辺の選び方のヒントを教えてくださいませんか？

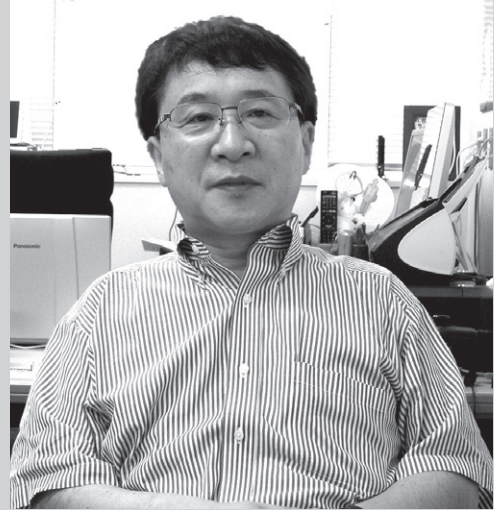
例えば、化粧品には、無香料・無着色・アルコールフリー・パラベンフリー界面活性剤フリー・紫外線吸収剤不使用・無添加などの表示があるので、化粧品を選ぶ際の参考にしてください。また、保湿機能・バリア機能改善作用を目的とした、天然保湿因子やセラミドなどが配合されているもので、乾燥症状の改善が確認されていますが、その一方で、植物抽出成分などによるアレルギー性接触皮膚炎が増えてきているため用心する必要があります。皮膚科専門医にたずねて頂くのが一番です。化粧をしたいと希望する女性が多い中、皮膚科医はなんとなくその分野を避けていました。でも皮膚のことに一番責任を持たなくてはいけないのは、やっぱり皮膚のプロである皮膚科医でしょ。だから積極的に美容皮膚科に関与していくべきだと思っています。

ところで、この10月13・14日に大阪で、先生が主催される「第63回日本皮膚科学会中部支部学術大会」に元広島東洋カープの衣笠選手が特別講演されますね。医学会で野球選手とは、とてもユニークな人選だと思えますが、その辺りを、差し障りのない程度でお聞かせいただけますか？

大会のテーマを「めざせ!鉄人の皮膚科学」としました。そこで衣笠祥雄さんには野球生活22年間の経験からプロフェッショナルの心構えや、人の在り方についてお話ししてもらおう予定です。何せ、僕たちの時代(古川先生は1978・昭和63年卒業)の「イチロー」ですからね。しかも知的レベルがとても高く、講演内容に期待しています。

最近、僕たちの世代も含めて、ちょっと云にくいのですが皮膚科医であるというプロフェッショナルな意識が希薄化してきているように感じています。特に、最近の皮膚科医の勤務時間は短くなっています。9時から5時とか、午前中だけとか。その結果、ここ数年で何が起きているかというと、湿疹や水虫だけを診て、エリトマトーデス、皮膚癌とか、ちょっと難しい患者さんだったらすぐに大学病院などにまわす例が多いですね。役割分担ってことで割り切っても良いと思います。「しかしあんた皮膚科医でしょ!」って言いたくなるような仕事ぶりが増えている傾向が全国的にあるようです。忙しくて一生懸命に、患者さんの目線で仕事をしている先生も大勢いるのですが…。

本来は皮膚癌でも膠原病でもアトピー性皮膚炎でも、診察出来ないといけません。スキル(経験に裏打ちされた自信)があってこそ、患者さんとの心のふれあいというか、暖かな良い関係が築けるのです。それにはいろんな分野の病気を一生懸命勉強しないといけません。短い勤務時間でもいいんですよ。それなら集中して勉強しましょうって…、中途半端はいけませんね。



古川 福実 (ふるかわ ふくみ) 先生のプロフィール

昭和53年03月 京都大学医学部医学科卒業
昭和61年01月 米国コロラド大学医学部皮膚科
Immunodermatology Fellowとして出張
昭和63年08月 京都大学医学部皮膚科講師
平成05年04月 浜松医科大学医学部皮膚科助教授
平成11年08月 和歌山県立医科大学皮膚科教授
平成22年04月 同付属病院副病院長

評議員・代議員： 理事：
日本アレルギー学会 日本研究皮膚科学会
日本皮膚科学会 日本アレルギー協会
日本病理学会 日本美容皮膚科学会
日本接触皮膚炎学会 和歌山県医師会

医者は生涯現役、サラリーマンのような「定年」はありません。毎日が学習なんです。だから、プロとはなにか…ってことを衣笠選手に熱く語ってもらって、そこから何かを得て自己啓発して頂けたらと願うのです。

先生は患者さんとの対話にできるだけ時間を割くということですが、アトピーの患者さんへのメッセージをぜひお願いしたいのですが…。

情報は医者に聴く。つまりインターネットとかに頼らないで、まずはお医者さんから正確な情報を仕入れましょう。僕は、初診も再診も診療しているので、3~4回来てもらえばその患者さんの全貌がわかります。同じ場所で継続して治療してきましたが、軽快あるいは治癒する患者さんが多いと感じています。

ただ最近、やっぱり若い子がね、無理してアルバイトとかして、もうちょっとゆっくりにした生活ができればアトピー性皮膚炎も良くなるのになあ!と思うことがしばしばあります。TARCなどの検査も、高いから検査しないでくださいと患者さんから云われるけど、それこそ「しなくていい」と云う訳でもありませんし…。

健康保険で認められている治療さえも20~30歳代の若い子は経済状況が思わしくないから受けられない…、そんな中、医療費を心配なくていい患者さんもおられます。1回あたり保険が有効でも3~4万円支払う必要がある皮膚疾患もあります。アトピー性皮膚炎にそのような高額医療が導入されたら、重大な不公平が起ってきそうです。一介の医者が口出できない分野ですが矛盾を感じますね。

夜遅くまでコンビニなどで一生懸命働いて税金を払っている若い人が普通の治療すら受けられない、もちろん人さまごまな事情はあるのですが。そんな訳で経済状況もたらす影響が診察室から判り忸怩たる思いです。アトピー性皮膚炎に十分な治療が行き渡っていない現状がありますが、できるだけ普通に治療を受けてください。残念ながらアトピー性皮膚炎に治療費への財政的な支援態勢はありませんが、相談していただければ可能な限り対応いたします。どの先生も思いは同じだと思います。

本日はお忙しいなか、有難うございました。ちょっとシリアスな現状を伺って胸が詰まる思いです。協会でも財政支援を含め何が出来るか早急に構築しなければ、いささか焦ってはおります。 文責 オフィスメイ 三原 ナミ